

interview

ヴァンサン・ラルデル Vincent LARDERET

日本の文化に触れた
ラルデル初の日本ツアー



「日本の聴衆はおとなしい、という人もいますが、それは正しくないですね。感動を表に出さなくとも、心は動いているのです。私にはよくわかります」こう語るヴァンサン・ラルデルさんは、ラヴェル直系のフランス人ピアニスト。10月中旬に、初の日本ツアーを敢行した。

「日本のお客さんは心の中で感動をしています。フランス音楽を理解してくれているという実感がありません。それに、演奏会できちんと聴いてくれるのも嬉しいですね。今回、初の日本ツアーで不安なところが多かったのですが、マネジメントも含め、日本人の特質、精神文化には感心しています」

ただ、残念なこともあるという。「今回、マスタークラスを日本で開講しました。ところが、学生がフランス音楽を持ってこない。これはさび

しいことです。やはりいろいろな国の音楽を学ぶべきです。私自身、ラヴェル直系の弟子でありながら、ドイツでドイツ音楽も勉強してきました。日本人にはフランス音楽をもっと学んでほしいですね」

各国の音楽を学びながらも、ラヴェル直系子ベルルミューターの系譜に連なるラルデルさんは、楽譜については厳格な立場だ。

「ベルルミューターの持っていた楽譜でラヴェルを学んだということもあり、私は作曲家の意図に忠実であることを第一にしています。楽譜と伝授を基礎に置いてラヴェルの意図を忠実に表現したい。その上で日本の皆さんにフランス音楽の真髄を聴いてほしいと思っています」

(文・写真)編集部 梶川俊一

通訳◎岡本和子

ヴァンサン・ラルデル

Vincent Larderet
●ピアノ

取材・文=上田弘子
写真=堀田力丸



初来日の知性派ピアニスト
ラヴェル、ベルルミューターの流れをくみつつ革新者

「長く待ちに待っていた日本での演奏」と言い、自信のプログラム。

「最近ブラームス作品の録音をしたので、まず日本でライヴ演奏を考えた。ラヴェルの「タフニスとクロエ」(ピアノ版)は招聘元からのリクエストでもありましたが、特にこの曲では聴く方が私のことを認知して下さるのではないかと思って、喜んで入れました」

多くの人が耳に馴染んでいる管弦楽版の「タフニスとクロエ」では、ピアノ版での魅力という点。

「管弦楽版をなぞってピアノで弾くのではなく、純然たるピアノ作品として出来上がっているものです。管弦楽版より透明感があり、作品の細かい部分も表現されていると思います。こんなに魅力的なピアノ作品なのにはほとんど知られていないのは、ラヴェル直系のワラド・ベルルミューターが、管弦楽版をピアノで弾くことを好んでいなかったことが要因としてあります。(ラヴェル)を彼のためにピアノ版でも書く」とラヴェルが言ったときも、ベルルミューターは断つたぐらいですから(笑)。私は1912年にデュラン社

から出された(「タフニス」)のピアノ譜で勉強を始めたところ、これが驚くほど楽譜(出版社)にミスがある。それでその部分を徹底的に検証して、ラルデル版として2014年にレコーディングもしました。ラヴェル作品での楽譜のミスは有名ですが、ラヴェル自身はとてども几帳面で楽譜、ベルルミューターにも厳格に指示していたぐらい。なのでラヴェルに会えたら、生前からなぜ出版社を放ったのか聞きたいです(笑)

「私が悩み迷っていた時期に出会いました。縁というのか、私が12歳で初めて聴いたのがゲルバーでした。彼は自分が熟知している曲しか教えないので、ブラームスは彼から徹底的に学びました。ロマン派の狂気の美というより、ベートーヴェンの継承と後年の予告というスケール感。そしてゲルバーからは、「どんな音楽でも最後まで飽きとらないと駄目だ」と教えられました。それは人生も同じですよ」

「私が悩み迷っていた時期に出会いました。縁というのか、私が12歳で初めて聴いたのがゲルバーでした。彼は自分が熟知している曲しか教えないので、ブラームスは彼から徹底的に学びました。ロマン派の狂気の美というより、ベートーヴェンの継承と後年の予告というスケール感。そしてゲルバーからは、「どんな音楽でも最後まで飽きとらないと駄目だ」と教えられました。それは人生も同じですよ」